

C-62 フランスの服装造形に見る美意識について—1925年を中心として—  
大分大教育 釘宮久美

目的 ここ数年來服装造形の上に、1925年様式即ち、「アール・デコ」の裝飾感覺が、よみがえろうとしてゐる。この現象は、服飾品の大量生産を目ざした機械工業生産による商品の画一性に対する拒否反応として出現したものであり、裝飾を排除否定しようとした機械主義造形理論の反動として抬頭したものと考えられる。人間性の根源に在りしむるための裝飾は何れ、工業生産機械との調和の中で、人間の創造性を、日常生活に確保する努力は如何になされるべきであるかが、今、向われてゐる。今回は、フランスの1925年前後をたずね、裝飾性を持つ美意識の側面を明らかにした。

方法 服飾、建築、室内裝飾、舞台衣裳の分野で特徴あるものを資料とし、時代性と共に、その美意識の抽出を試みた。

結果 鯨骨を入れたコルセットを廢止し、単純なシルエットを創り出しながら、裝飾を捨てなかつたパリのデザイナー、ポール・ポワレの作品によつて、服装造形の上の一つの轉換期がもたらされた。やがて第一次世界大戦への参戦、そして勝利は、「ガルソンヌ」の出現となつて、社会的活動への参加をうながし、コスチュームは細身のチューブラーラインとなる。この頃、パリにはロシアのバクスト来り、黒人芸術家来り、浮世の線の裝飾性に加えて、彼等の新鮮な野蛮さが原色の導入という形で影響をもたらした。ドイツでは、グロピウスによるバウハウスの造形教育が期を一にして行われつつあるのであるが、1925年様式は、それ以前の裝飾様式と、この頃に抬頭してくる機械様式との接点にあつたところに、その特徴があると思われるのである。